

北京シンポジウムについて

北京シンポジウム物理実行委員会

京都ワーキング・グループ

この論文は北京シンポジウム物理実行委員会，素粒子論グループ日中物理学交流委員会，同研究情報連絡センター等における討論と活動にもとづくものですが、文章の責任は完全に著者達が負うものです。

§ 1. これまでのいきさつ

すでにお聞き及びの方も多数おられると思いますが、昨年来世界科学者連盟北京センターを中心にして、企画され、わが国をはじめ関係各国の科学者団体の合議によつて進められてきた、アジア，アフリカ，ラテンアメリカ地域の科学者を主体とした北京科学シンポジウム開催の計画が、いよいよ今年8月下旬北京において実現される運びになりました。世界科学者連盟（The World Federation of Scientific Workers—WFSW—会長パウエル）は、二次大戦後間もない1946年ジョリオ・キュリーらの提唱で、イギリス，アメリカ，ソ連などの科学者団体によつて、科学者の社会的責任を果すことを目的として結成されました。現在わが国を含めた世界の数10ヶ国の科学者団体が加盟しています。（日本における世界科連への加盟団体は形式上民科となつています。）北京センターは、この世界科連の東アジア地域センターとして1962年の連盟総会で設置が決定されたものです。

昨年9月北京で開かれた北京シンポジウム準備会議には、日本からも柘植秀臣（法政大），井上清（京大），原善四郎（東大生産研）の3氏が出席されましたが、その際発表されたコミュニケ（Appendix）によりますと、北京シンポジウムの主題は「民族独立を勝ちとり擁護し、民族の経済と文化を發展させ、人民の生活を改善し高めることに関連した科学上の問題」と、「科学者の興味をもっているその他の科学上の問題」となつていて、高い水準の研究成果と討論が期待されています。

わが国では、昨年8月にこの企画を伝え聞いた諸団体と有志によつて、北京シンポジウム日本連絡協議会（略称「日連協」、会長 坂田昌一，事務

北京シンポジウムについて

局長 原善四郎) が作られ、前述の北京における準備会にも参加して開催に協力してきました。

私達の属する素粒子論グループでは、日中物理学交流委員会(日中)と研究情報連絡センター(KJR)とが中心になつてこの計画について討論を行い、昨年秋の学会の際、何らかの形で北京シンポジウムに参加しようという結論に達し、日連協に代表として暫定的に野上茂吉郎氏を送りました。今年2月に基研で開かれた素粒子の構造研究会のとき、坂田、武谷氏を含む全国から集まつた10数名の人達の会合において、北京シンポジウム開催の意義が討議され、その結果素粒子論グループの行つて来た研究活動と社会活動の総括を行つて、それを参加テーマにしようという申し合わせがされました。

他方、素粒子論グループ以外にも北京シンポジウム参加の計画をひろげる必要が認められて、原子核実験、原子力関係、物性論関係にも呼びかけ、物理学実行委員会という全国一体の組織を作つて、日連協に参加することになりました。その結果、現在までに物理実行委として提出された論文は、素粒子関係が3編、原子力関係が1編、核実験関係が1編の計5編となつています。

また物理実行委として実際に北京シンポジウムに出席していただく派遣者についての人選は、4月の学会の際に予備的な討論を行い、4月22日の学術会議の総会の際に、学術会議物理学研究連絡委員会と物理実行委の合同会議を開いて、坂田昌一(日連協の会長として)、町田 茂、永田 忍、森田右の4氏に決定されました。その他物研連の中でこれまで日中物理学交流の実現に尽力されて来た有山兼孝先生は、中国からの特別な招待により、渡航されることになつています。

なお中国科学院副主席の物理学者周陪源氏から坂田昌一氏宛に、日本の科学者が多数北京シンポジウムへ参加するように協力を求める手紙があつたことをつけ加えておきます。

§ 2. 北京シンポジウムの開催の意義

さて、アジア、アフリカ、ラテンアメリカにおける科学文化の特徴は何でしょうか。それは欧米諸国に比べて水準が低く、遅れているということです。

「コミュニケ」にも述べられているように、その主な原因は帝国主義と植民地主義にあります。これらの地域の殆んどは、長い間帝国主義、植民地主義の抑圧と収奪を受け、貧困のどん底にあえいで来ました。したがって科学・文化が発達する余裕がありませんでした。しかも帝国主義者達はこの国々の民族文化と科学の発達を妨げておきながら、「これらの民族は科学的能力に劣っている。文化が低い」などと言つて軽べつしています。戦前から戦時中の日本の我々が朝鮮の人々に対してとつてきた態度も同様なものでした。

しかし、これらの諸民族は長年の苦しい闘いをへて、民族の独立を着々と勝ちとりつつあります。そして今や、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国民の民族独立運動が、世界史の動向を決定する基本的な力の一つになってきたことは何人も否定できない事実となつています。これらの諸民族は民族の独立を擁護し、民族の経済、科学、文化の建設のため、意気に燃えて出発しました。これは世界の科学、文化が欧米の独占物であつた時代に終止符を打ち、これらの諸国の科学文化の立ち遅れを克服し、全世界的に科学文化の花が美しく開く新しい時代の到来を意味します。このような意味から、今度の北京シンポジウムは、世界の科学史において画期的な意義をもつものと考えられます。

次に我が国の科学文化について考えてみます。かつて朝鮮、中国をはじめアジア、大洋州の国々を帝国主義的に武力で侵略し、その国々の民族を抑圧し、それら諸民族に対するべつ視をあおり、日本の科学文化の先進性を誇つて来ました。それは欧米諸国が、帝国主義的にアジア、アフリカ、ラテンアメリカの諸国を侵略した態度と同じものでした。しかしそこには見落してはならない違つた点もあります。というのは、日本の資本主義が欧米にくらべて著しく遅れて発達し始めたことによります。そのことを反映して、日本の科学文化には現在もなお根強く残つている（或いは現在ますます強くなりつつある）欧米崇拜の思想、植民地的性格があることです。この点が、日本の科学がいくらか先進性をもちながら、反面いたるところで歪んで発達して来た原因だと思ひます。したがって日本の科学者が北京シンポジウムに参加し、真に欧米一辺倒でない我が国独自の科学文化を発展させ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の科学者と相互援助し合うことは、我が国の科学文化に

北京シンポジウムについて

とつて、大変意義のあることだと思えます。

さらに、現在日本の隣国である中国に対し、友好を妨げ中国を孤立させようとするたくらみに、日本の科学者をまき込もうとする計画があります。我々は科学者の責任として、このような計画を黙つて見ているわけにはいきません。このような計画に反対し、進んで中国の科学者との友好を増し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの遅れた科学文化を急速に発展させる共同の事業と取り組むことが、我が国の科学者の社会的責任の一つであると考えます。このような意味からしても、北京シンポジウム開催の意義は大なるものがあると思えます。

以上のような議論は、現在物理学実行委に参加している人達の間では、十分に討議され、その結果として、物理実行委として北京シンポジウムに参加することが決められました。

§ 3. これから行うべき活動の内容

北京シンポジウムについては、物理研究者の中にもまだまだ知らされていない人達が多数いると思えます。また「コミュニケ」の精神が十分ゆきわたつていないとは必ずしも言えません。「コミュニケ」に賛成できない人も、できる人もあると思えますが、何よりもまずこの「コミュニケ」を広く討論していただくよう努力をすべきだと思えます。

現在日連協へ提出してある物理関係の論文は、京都ワーキング・グループ「素粒子論グループの創造と社会的活動の思想的系譜」、名大グループの「坂田模型の方法」、核力班の「日本の素粒子論における方法」、核実験ワーキング・グループの「核研の設立とその成果」及び原子力潜水艦グループの「原子力潜水艦問題における原子科学者の役割」の計5編です。これらの論文は一回以上全国的に回覧され、注文がつけられ、またテーマによつては数回の全国的な討論が重ねられました。しかしまだ完全には出来上つていないものもあり、京都ワーキング・グループなどは、今後長期にわたつて研究を続ける計画にしています。

さらに、実際に北京シンポジウムに物理学の代表を5名も送ることになれば、大変な難問が生じます。というのは渡航費の問題です。日本の政府は中

北京シンポジウムについて

国へ公務員が渡航することを認めません。まずそれを認めさせるための運動を行い、さらにそれを国交回復にまでもつて行かなければなりません。いわんや渡航費などはビター文も出してはくれません。(日本の政府は科学者の外国渡航のための費用は、どこの国へ行く場合でも、なかなか出しません。日本の政府は科学者の国際交流に関してこの点においてのみ、各国を平等に扱うつもりらしい。)我々は完全に自力で北京に行かなければならないのです。その為にも、多くの科学者の貧しい財布の中から浄財を集める努力を今からしなくてはなりやせん。この資金援助も北京シンポジウムへの参加の一つの重要な形態であると考えます。

以上が物理実行委が現在行っている、あるいは今後行なわなければならない活動の重要な点です。そこで私達は物性研究の読者の皆さんにお願いしたいと思います。それは次の3点です。

- (1) コミュニケをいたるところで討論し、広げていただきたい。
- (2) このような科学者のシンポジウムは今年だけでなく、来年以後もひき続き開催される計画になっています。このシンポジウムについての御意見を物理実行委、素粒子論グループ日中、K J Rにお寄せいただきたい。そして積極的に実行委に参加していただきたい。
- (3) 今後渡航費カンパについてのお願いにあがる計画になっています。物性関係は有山氏を中心に行う予定になっていますがその際はできるだけ援助していただきたい。

以上の3点を重ねてお願いし、皆様の北京シンポジウム参加の呼びかけにしたいと思います。

(Appendix)

1964年北京科学シンポジウム準備会議コミュニケ

中華人民共和国科学技術協会と世界科学者連盟北京センターは共同してアジア、アフリカ、ラテンアメリカ大洋洲地域の諸国の科学者を、1963年9月27日より30日まで北京で開かれた、1964年北京科学シンポジウム準備会議に招請した。招請に応じで会議に出席したのはアフガニスタン、アルジェリア、オーストラリア、ブラジル、ビルマ、セイロン、中国、キュー

北京シンポジウムについて

一バ，ガーナ，ギニア，インドネシヤ，日本，ケニア，朝鮮民主主義人民共和国，マリ，メキシコ，モンゴル，ネパール，ナイジェリア，パキスタン，ソマリア，ベトナム民主共和国の22ヶ国の科学者である。

準備会議の開催に先だつて、出席した科学者たちは、世界科学者連盟北京センター成立慶祝大会に参加した。

会議は、国際学術交流を強化することは、アジア，アフリカ，ラテンアメリカなどの地域の大多数の国のきわめて切実な要求であることを認めた。

会議出席者の圧倒的大多数は、帝国主義と植民地主義が、アジア，アフリカ，ラテンアメリカ地域の科学文化の立ちおくれの主要な根源であり、民族解放運動の主要障害であり、世界平和にとつて重大な脅威であることを認めた。科学者の社会的責任にかんがみ、会議出席者の圧倒的大多数は、科学者が民族独立をかちとり擁護することに努力しなければ、これらの地域の科学事業は発展できないことを認めた。

4日間にわたる協議と討論をへて準備会議は1964年科学シンポジウムに関して、以下の事項を可決した。

1. シンポジウムは、1964年8月北京において行い、その会期は7日ないし10日間とする。
2. シンポジウムの準備は主催者である中国科学技術協会と世界科学者連盟北京センターが、責任をもつてこれに当る。
3. シンポジウムに用語は、中国語，英語，フランス語およびスペイン語とする。
4. シンポジウムに提出される論文またはそのレジユメは、1964年4月30日までに中国科学技術協会または世界科学者連盟北京センターにとゞけられなければならない。

会議出席者の圧倒的大多数は、シンポジウムの主題は民族独立をかちとり擁護し、民族の経済と文化を発展させ、人民の生活を改善し高めることに関連する、科学上の諸問題とすべきであることを認めた。科学者の興味をもっているその他の科学上の問題も討論できる。

今回の会議は、アジア，アフリカ，ラテンアメリカ，大洋州地域の諸国の科学者の団結協力の一つの良好な出発点である。今回の準備会議と明年の科

学シンポジウムを通じて、各国の科学者はいつそう緊急に団結し、相互尊重相互支持の原則の下に、これらの地域の科学文化事業の発展を促進するうえに有益な貢献をするであろう。

ニ ュ ー ス

○ 九大物性論懇談会 5 月例会 [5 月 16 日]

北島一徳 (九大応力研) : 結晶転位に関する最近の研究 [総合報告]

米田泰治 (九大工応理) : X 線の異常反射 [平滑な物質表面においては X 線の正常反射のほかに異常反射の存在することが講演者によつてはじめて明らかにされた。この異常反射は 2 度ぐらいの glancing angle で表面に入射した場合に見られる。今のところ原因は不明であるが、平面物質が金属である場合には電子構造に関係があるらしい。参照 ; Phy. Rev.

131 (1963) 2010]

○ 阪大理学部の新築が出来たので、理学部の一部が 5 月から、豊中市北刀根山' に移転しました。

人のうごき

△ 松村 温氏 (九大理) : 5 月に渡米された。

住 所 University of Minnesota
Institute of Technology
Department of Chemistry
Division of Physical Chemistry
Minneapolis 14
Minnesota 55455
U. S. A.